

「2012年の北朝鮮」

(新体制下の政治・経済変容と対外関係の実態分析)

[研究概要]

2011年12月の金正日・朝鮮労働党総秘書の死去を受け、北朝鮮の動向について一層の関心が集まっている。不透明性と不可視性をその特徴とする体制に生じた時ならぬ大きな動きに対する一般的な関心の高さ、そして北朝鮮情勢が東アジア地域の安定と日本の安全保障環境に直接的な影響を及ぼす要因であることが、「金正日後の北朝鮮」の状況と、その存在の対外的公開からわずか1年余りで体制を引き継ぐこととなった後継者・金正恩と北朝鮮指導部の動向に対する注目として表面化しているものと言えよう。

ただし、北朝鮮に対する情報が(例えば1994年7月の金日成・国家主席の死去当時と比べて)全般的に増加している一方で、北朝鮮の実態は依然として上述のごとく不透明・不可視的なものであり続けている。また、概略的な北朝鮮の姿から各論に踏み込んだ、より精緻な分析が必ずしも十分とはいえない状況にあるとも言える。

また、そのように各論に踏み込んだ分析を行うに際しては、経済・対外関係さらには国内政治の間の相互作用を念頭に置く姿勢が必要となる。単純に北朝鮮の特定の一分野に狭く対象を絞った分析のみをもってしては、北朝鮮の変化を予測するとの現実的課題に対応することが困難となるためである。経済政策における優先順位には国内政治におけるプレーヤー間の力(権力)関係の影響が及び、また外交が内政と相関関係を持つことは、こと北朝鮮においても何ら変わるところがない。特に、北朝鮮体制のいわば命脈を握る中朝関係や、死活的な重要性を有する米朝関係という対外関係の状況は、国内政治や経済情勢(および政策)にも大きな影響を及ぼしうる。このように、総体としての北朝鮮を視野に入れながら各トピックへと深く分け入り、また各分野に埋没することなく全体像を措定するスタンスが、北朝鮮情勢の分析においては求められると考える。

このような認識に立ち、本プロジェクトでは、定点観測のスタイルをとりつつ、北朝鮮情勢を客観的かつ精緻に分析し、広く外交安全保障政策の実務者・研究者の双方にとって有益な情報を提供する考えである。より具体的には、本プロジェクトの構成各員が全体的な問題意識すなわち後継体制下の北朝鮮の政策がいかなる変容を示す(示さない)のかを明確に共有しつつ、それぞれの分野について、個々のファクト(ディテール)を捨象せず緻密な分析を行うとともに、上記の相互作用を念頭に置きつつ、一定の「像」を描くという作業を実施したい。

[研究プロジェクト・メンバー]

全体総括(主査):

- ・小此木政夫(九州大学特任教授・慶應義塾大学名誉教授)

「国内政治」班:

- ・政治全般:伊豆見元(静岡県立大学教授)
- ・国内政治:平井久志(共同通信客員論説委員)
- ・南北関係:倉田秀也(防衛大学校教授・日本国際問題研究所客員研究員)

「經濟政策」班：

- 經濟全般：三村光弘（環日本海經濟研究所主任研究員）
- 中朝經濟：堀田幸裕（霞山会文化事業部研究員）
- 南北經濟：室岡鉄夫（防衛研究所図書館長）
- 国内經濟：飯村友紀（日本國際問題研究所研究員）

「對外關係」班：

- 对米關係：中山俊宏（青山学院大学教授・日本國際問題研究所客員研究員）
- 中朝關係：平岩俊司（関西学院大学教授）
- 对口關係：兵頭慎治（防衛研究所地域研究部米欧ロシア研究室長）

以上